

める。国民的利益や、現実政治の問題をしばらく置くとしても、著者の言う帝國主義的行動の概念が不明確な点が先ず指適されるであろう。レーニンの掲げたメルクマールを著者に要求すべきでないとしても、少くとも、例えばパナマ運河通行税に関する問題を、多額の鉅業投資を有していたメキシコに関する問題と同列に置くことは許され難い。従つて著者があげた革新主義者の帝國主義的行動は尙充分の検討が必要であろう。この点更に、著者が一度も言及していない独占資本の役割とその革新主義運動との關係が、帝國主義と革新主義を結ぶ決定的中間項として設定されるであらう。ルーズベルトの終止変らぬ支持者

であり、F・マンゼイと共に革新党の唯一の財源であつたG・W・パーキンズがモルガンのパートナーであり、一九一五年海軍連盟の指導者中少くとも七人がモルガンと關係をもち、又徴兵制と政府と実業との協力を提唱した国民防衛協会の委員中九人が金融産業界の指導者であり、モルガン自身多数のいわゆる愛國組織に名を連ねていたこと等、この接近の可能性を予想させる。同時にルーズベルトの新國民主義の理念は、之を直ちに帝國主義

と結合せしめるよりは、独占資本の受容性を通して、それを見た時、より説得力をもつものとなるのでなからうか。

次に革新主義なる語が著者に於いては一九二二年革新党を結成した、従つてルーズベルトに代表される運動にのみ關して言われていることが注意されねばならない。ウイルソンの新自由主義の系列をも含めたより広い層の本論文の考察外に置かれては、革新主義運動全体を見渡す時、ウイルソンのな従つてジェファソンの伝統に立つ革新主義者の存在は、新國民主義を自覚した革新主義者よりも、少くとも二〇世紀初頭に於いてはより重視されるべきものでなかつたか。従つてルーズベルトに従つた人々の中にすらこの系列に立つと見做される人々が存在するのでないか。

この点に於いて、ルーズベルトは外交問題に於て孤立していたとする従来の説は尙更めて考えらるべきものを持つと言えよう。同時にこの点は、アメリカの孤立主義の伝統とも関連する。この伝統が反帝國主義運動の大きなモメントであつたことは明らかであり、しかもそのアメリカ制度の優越性に関する信念に於いては、帝國主義者と共通していたことを

考える時、この伝統が如何にしていわゆるモノロー主義の新解釈乃至は帝國主義に転じて行つたかを考えることが問題とならう。そしてここに再び独占資本と新國民主義の關係がとり上げられるのではないか。

其他、ルーズベルトやウイルソンの現実政治家としての面、移民問題等、尙幾つかの疑念が感じられるが、いずれにせよ先に述べた如き著者の問題提起の方向が今後の研究にとつて大きな意味をもつものであることは否定し難い。

志邨晃佑

Pierre Gouyon: The Tropical World

Its Social and Economic Conditions
and its Future Status (*Longmans*)
1954

1954

本書は Gouyon の原著 *Les Pays Tropicaux*,

1948. の英訳 (訳者は E. D. Laborde) である。著者は現在 Collège de France 及び Université de Bruxelles の教授を兼ねるが、戦前には数年に亘つて仏領インドシナにおいて研

究をこつて、既に *Les Paysans du delta tonkinois*, 1936 や *La terre et l'homme en Indochine-Orient*, 1941. などの語論著によつて、熱帯研究の第一人者として知られた著名な学者である。

本書はこの著者のインドシナにおける貴重な体験と、赤道アフリカ・南米など熱帯各地方に試みられた調査の豊かな知識とにもとづき熱帯地域に関するすぐれた概説書である。

さて、いわば全体の序章に当る第一章に於ては、熱帯地域の一般的特色として、人口が稀薄であり、文明が後進的であることがあげられている。しかし東南アジアのみはこの例外で、文明の程度は高く、稠密なことが指摘され、熱帯には二つの地域的類型が區別出来るとして、問題の提起がなされている。しかも通じて熱帯の人間生活を制約する自然条件はその不健康性 *Unhealthiness* と土壌の貧困にあると考えられ、第二、第三章に於てこの問題が改めて展開される。即ちここではマリア・腸の諸疾患・黄熱病・睡眠病など熱帯風土病の發生状態が例証された後、この熱帯の不健康さが人口の集中を妨げ、文明の発達を阻害しているとともに、逆にかかる劣つた

社会的諸条件が、常に熱帯住民の生命を危険にさらすものであるとして、著者は熱帯の持つ矛盾を鋭くついているのである。又土壌については、熱帯のそれは肥沃度に乏しいことがトンキンデルタの例その他によつて示され、この非肥沃性の原因が氣候的要因——高温と多雨により塩基質・窒素化合物・有機質が流出すること、又乾雨雨季の交代する場所では農業に不適な固いラテライトが生ずることなど——と人間の手による植物被覆の破壊の結果起る土壌侵蝕とに求められる。そして

とくに後者、即ち「植物被覆の破壊——農牧業經營——土壌侵蝕——土地の荒廢」のプロセスを著者は重視し、この過程の進行が各地域においてどのように促進され、或は阻止されているか、又將來如何に阻止されるべきかは、熱帯研究の中心課題であるとして、本書の全体を通じ、終始この問題に強い関心が示されているのである。

熱帯に広く行われる焼畑農業とは、かかる熱帯土壌の性格にアダプトした農業經營の形態として注目される。従つて焼畑農業について論じた第四、第五章は、後の西欧文明の影響を扱つた第十一章とともに、本書中におい

てもつとも精彩に富む部分となつてゐる。第四章では火入——耕作——移動（休閑）をくり返し土壌の荒廢を防ぐ焼畑の經營様式が、世界各地の例を豊富に引いて述べられ、第五章では焼畑に伴う土地所有の形態・反当取量、更にその人口支持力などが論ぜられて熱帯における焼畑農業は自然環境にアダプトした農業經營ではあるが、その弱点は人口増加のペースを保持しえないことであるとしている。つまり人口増加に伴う土地不足は必然的に休閑期の短縮を促し、これが土壌を荒廢に導く。

従つて焼畑農耕は大きな人口集団或は高度な文明社会を維持することはできないというのである。この例として S. G. Morley の一連の研究にもとづき、マヤ文化の移動と衰退の原因が、焼畑による土地の荒廢にあつたことを詳細に述べているのが注目されるのである。熱帯において土壌の荒廢をもたらすものは農業のみではなく、牧畜の影響も無視できない。第六章では熱帯におけるこの牧畜の問題が取扱われ、東アフリカの例——熱帯地域は一般に牧畜に適さず、熱帯で牧畜民がいるのはこの地域のみ——によつて、過放牧が草と土壌の荒廢をもたらす重要な要因となることが

指摘される。この場合、過放牧の問題が牛を富の象徴と考へる東アフリカ牧畜民の社会態度と関連しつつ論ぜられている点などまことに正しい理解の仕方だといわねばならない。ところで熱帯における食生活は殆んど全て植物性の食料に依存している。しかもこの植物性の食物ですら不足勝ちであり、栄養のバランスも悪く、一般に栄養失調(Under-nourishment)が熱帯を支配していることが第七章に於て強調されている。その原因としては土壌の貧困なこと、降雨の不規則なこと、風土病の多いことなどのほか、調理法の幼稚なことなどがあげられているが、いずれにしてもこの栄養失調状態が、風土病と共に熱帯住民の労働能率を著しく低いものにして注意されるのである。第八章では熱帯における工業化の問題が検討されるが、熱帯の直面する課題は工業化のそれではなく、土地利用・人口増加・健康などの問題即ちインダストリアルなものではなく、ルーラルな問題であると述べられ、この章は極めて短いものとなっている。しかしこの点については、インドをはじめ工業化に深い関心をもつ東南アジア諸国の現状を考へるとき、著者の右の如き意見にいささ

かの疑問を抱くのは評者だけであろうか。一般に熱帯地域は、前述の如く人口稀薄である。しかし熱帯には東南アジアや中南米の一部、アフリカの一部にみる如く人口の稠密な地域もあり、これらの人口の多い熱帯地域の研究は熱帯全体の発展を考へる上に重要な意義をもっている。このような観点から第九章では主として西アフリカに例をとり、農業発展の可能性が論ぜられている。即ちナイジェリアを中心とした地域の稠密な人口は、地中海文化の影響をうけた、比較的集約度の高い農耕によつて維持されているが、人口の増加に伴う休閒期の短縮はここでも土壌の荒廃をもたらしている。しかしこれに對して一部では、混合農業の導入により土壌の荒廃を防ぐに成功し、又他のギネア湾岸の一、二の地域では、水田耕作により食糧問題の解決が計られ、更に栽植農場における樹木栽培は土壌の荒廃を伴わない農業として効果をあげていることなどが指摘されている。この西アフリカの例から、著者は将来の熱帯農業の改善の方向を、とくに水田耕作と樹木栽培に求めようとしているのは注意すべきであろう。次の第十章「熱帯アジア」では、著者のもつとも

親んだフィールドであるインドシナを例として、焼畑を行う高地部と水田耕作を行う低地部の人口密度の差異が指摘され、後者は前者に較べて、外来文化の影響をうけ、進歩した社会・政治機構と高い集約度をもち、良好な健康状態を維持していることが述べられている。而してかかる水田地域における高い人口密度を可能にした要因は、自然的なものではなく、生活水準の低いこと及び植物性の物資に依存するその物質文化に求むべきだとされ、インドシナ以外の他の地域の例証をも加えつつ、熱帯アジアにおける水田耕作・人口密度・生活様式の関連が見事に描出されている。

最後に第十一章に於てヨーロッパ文明の熱帯地域への侵入に伴う諸問題がとりあげられる。いうまでもなくその主題はプランテーションであり、その熱帯の原住民社会に及ぼす影響を弊害と利益の二つの面から、豊富な例証をあげつつ考察される。まず第一の面に關しては、それが二つの異つた発達段階の文化の衝突であるという点に不幸の発端があるとされる。プランテーションによつて熱帯に導入された商品経済は、作物の商品化を促し、土

地利用の集約度を高めることを要求する。この結果犁耕が実施され、休閒期の短縮が余儀なくされるため、土壤侵蝕は激化し、やがては原住民農業の体系は破壊されてしまうといふのである。かかる過程の進行が熱帯の自然環境と密接に関連したものであることは明らかであるが、更に人口稀薄な熱帯にあつては、労働力が不足するため、勢い原住民に強制（半強制）労働を課すことにもなり、これが原住民社会を崩壊に導くことが強調されているのである。しかしながら他面、プランテーションに伴つて導入された西欧文明が熱帯の生活の向上に貢献した点も少くない。その第一は近代医学の進歩による風土病の克服である。これは土地利用の改善と密接に結びつき、むしろ従来から人口の多い地域が健康状態の改善に於ても進んでいることが指摘される。次に西欧文明は熱帯に世界市場への門戸を開いた。熱帯特産の農作物の幾種類かは広大な販路を得て増産され、黄金海岸のココアのように原住民の富を増し、その生活水準の向上に役立つものも少なくないと述べられている。ギネア湾岸の油ヤシ、ウガンダの綿、ウルンディのコーヒー、東インド・太平洋

のコブラ、ベンガルのジュート、マレーのゴムなどがその例であり、これらのプランテーションの成功は、食糧供給の十分な水田耕作地域におけるプランテーションの成功とともに熱帯の将来に明るい光を投げかけるものとされている。とくに樹木栽培に基礎をおく「Tree Plantation」は、土壤侵蝕をもたらしないう安定した栽植農業の方法として、集約度の高い水田耕作とともにその重要性が高く評価されているのである。

以上「熱帯地域」の内容についてその極くあらましを紹介したのであるが、僅か二〇〇頁足らずの小冊子に熱帯地域のもつ複雑な問題が見事にまとめあげられている。多年熱帯研究に従事した著者をえてはじめてなしうることであるが、とくに熱帯各地域に亘る豊富な例証は、問題点を一層明確にし、本書の内容を精彩あるものとしている。ただここで惜

地に起りつつある人種問題や民族運動に関しても全然意見が述べられていない。こうした問題について著者の今後の論評が期待されるころである。しかしこのような不満も実は決してそれほど重要なものではない。何故なら熱帯の社会・経済諸条件に対する著者のすぐれた分析は、たとえ農業への傾斜が大きくても、十分それ以外の問題を我々自身で考える際の基礎を与えてくれるからである。ともあれ、熱帯全体をとり扱つた適当な概説書のみられない今日、本書を手にしうることになつたことは未来の土地、熱帯のためにも心から喜ばねばならない。

—— 佐々木高明 ——

執筆者紹介

- | | |
|-------|-------------------|
| 佐伯 富 | 京都大学助教授 |
| 田中 稔 | 奈良国立文化財研究所員 |
| 伊藤 道治 | 京都大学人文科学研究所
助手 |
| 佐藤 長 | 京都大学助教授 |
| 志郷 晃佑 | 京都大学大学院学生 |
| 佐々木高明 | 京都大学大学院学生 |